

## 郡山遺跡の整備計画についてご意見を募集しています

本市では、郡山遺跡の令和 15 年までの整備内容について記した「史跡仙台郡山官衙遺跡群整備基本計画」の策定を進めており、現在 11 月 25 日から 12 月 24 日までの間、計画の中間案についてパブリックコメントを実施しています。ぜひご意見をお寄せください。



計画の内容は↑の二次元コードから確認頂けます。



仙台市文化財課が行う各イベント等の情報は  
下記二次元コードを読み取ってアクセス

仙台市文化財課  
公式SNS (X)



毎日情報発信中！  
フォローと今日の感想をぜひポストしてみてくださいね

仙台市文化財課  
ホームページ



ホームページをリニューアルしました！文化財課の情報がひとまとめにしてあります

## 郡山遺跡発掘調査(第 341 次) 遺跡見学会資料

仙台市教育委員会文化財課 令和 7 年 12 月 13 日(土)

### 1 調査概要

遺跡名 郡山遺跡

調査原因 国庫補助による遺構確認調査

調査主体 仙台市教育委員会（担当：文化財課）

所在地 仙台市太白区郡山三丁目、五丁目

調査面積 約 222 m<sup>2</sup>

調査期間 令和 7 年 9 月～12 月

### 2 郡山遺跡とは

郡山遺跡は飛鳥～奈良時代の官衙（役所）跡で、I 期官衙と II 期官衙の二つの時期があり、多賀城創建以前の陸奥国を統治する役割を担っていたと考えられています。これまでの発掘調査により、II 期官衙では遺跡の中心部に大型の建物が整然と配置されていたことがわかつており、石で組まれた池（いしづみいけ）の跡も発見されています。この石組池では蝦夷との儀礼を行ったと考えられ、同じような池跡が発見されるのは、飛鳥地方以外では郡山遺跡のみです。これらのことから、II 期官衙は陸奥国の国府であったと考えられています。

また、西側に隣接する西台畠遺跡や長町駅東遺跡には、800軒を超える竪穴住居跡があり、大きな集落が近くにあったことも明らかになっています。



第 1 図 郡山遺跡と周辺の遺跡

### 3 これまでの発掘調査

郡山遺跡のある太白区郡山地区では、大正 2 (1913) 年に漆の入った土器が発見され、その後も瓦などが出土することが知られるようになりました。昭和 54 (1979) 年に初めての発掘調査が行われ、昭和 55 (1980) 年から継続的な発掘調査が行われた結果、平成 18 (2006) 年に「仙台郡山官衙遺跡群 郡山官衙遺跡 郡山廃寺跡」として国史跡に指定されました。



第 2 図 方四町 II 期官衙イメージ図

これまでの発掘調査により、郡山遺跡では7世紀後半代にI期官衙を取り壊し、II期官衙へ建て替えを行っていることが分かりました。I期官衙は日本海側に設置された「渟足柵」や「磐舟柵」と同じような地域において政治や軍事の拠点となる「柵」跡であり、II期官衙は陸奥国の国府であったことが明らかになってきました。

このII期官衙は、方四町II期官衙を主要官衙として、南方官衙（西地区・東地区）、寺院西方建物群、寺院東方建物群、郡山廃寺など、機能ごとに分けて配置されます。方四町II期官衙は、一辺約533m四方に「外溝」を巡らせ、空閑地を挟んで「大溝」と「材木列」（約428m-四町四方）で、官衙の内外を区画しています。この官衙の内部には、中央から南寄りの場所に中心となる正殿、石敷（バラス敷き）、石組池、樓状建物などが配置されています。

#### 4 今年度の発掘調査について

今年度は方四町II期官衙政庁部に調査区を設定し、発掘調査を実施しました（第3・4図）。このうち南門跡について、発掘調査現場を公開します。

発掘調査の結果、南門部分では門の柱跡が確認できました。

##### ○南門跡

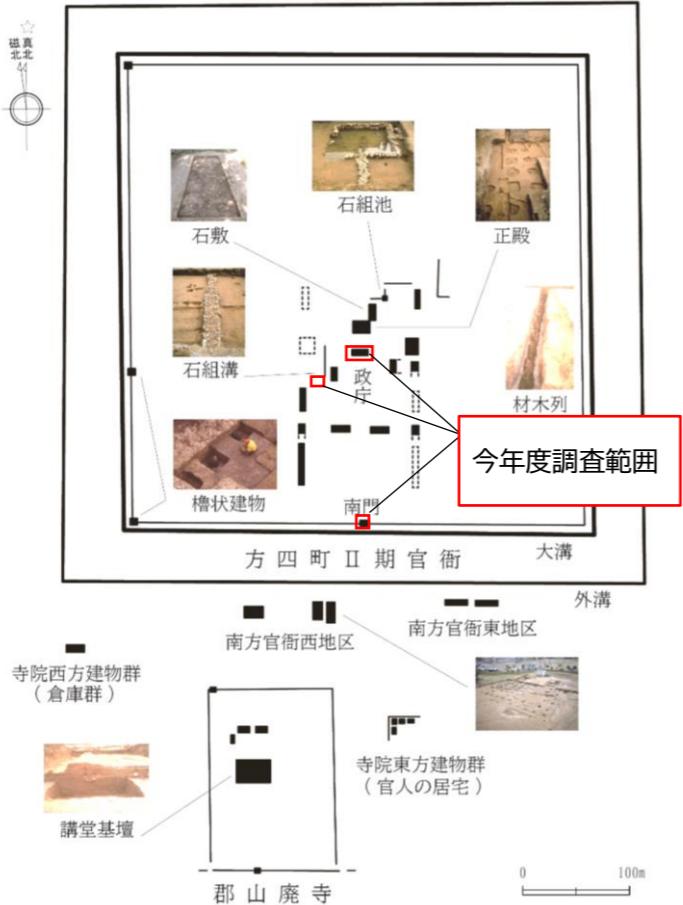
今回の発掘調査では、9基の柱跡が発見されました。このうち4基は昭和60年の発掘調査（第56次調査）で発見されていたもので、今回新たに5基の柱跡を追加で確認しました。

柱を据えるために掘られた穴は、平面形状で円形または隅丸方形で掘り込まれており、規模は直径1.2m～2.3mにおよびます。この規模は建物跡の柱を据えるための穴と比べ規模が大きい点が指摘できます。また、掘られた穴の埋め土を観察すると、一部が層状になるように埋め戻されていました。

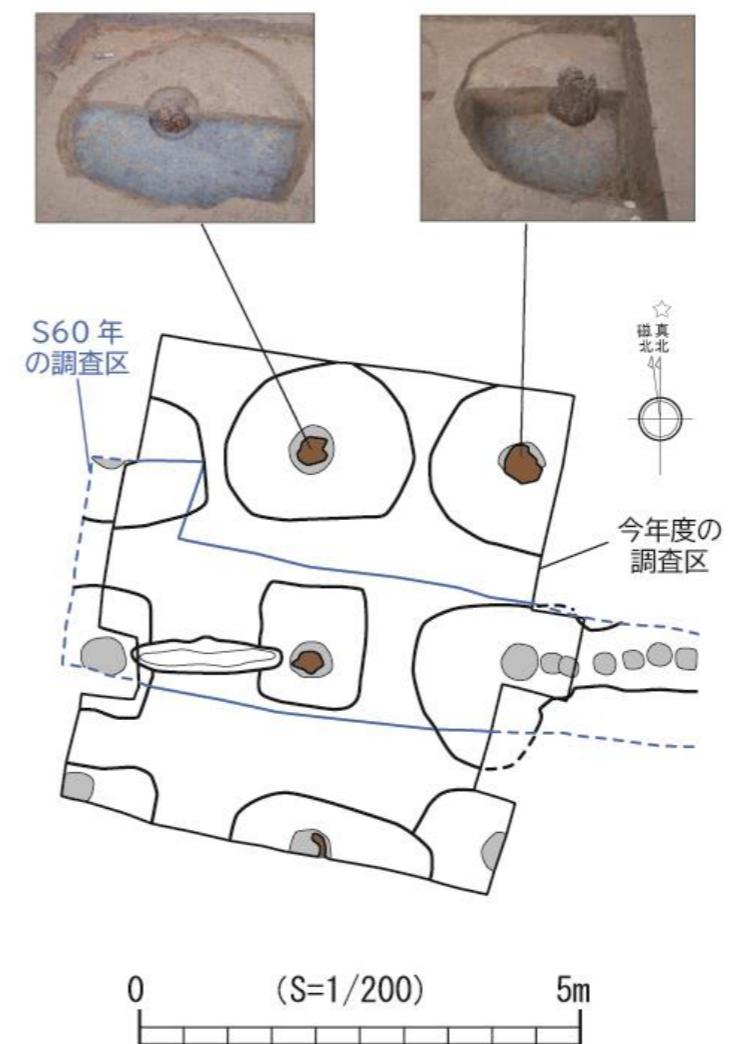
9基の柱穴のうち5基では、当時の門に使用されていた柱材がそのまま残っており、直径約50cmの丸太の柱を用いていたことが分かりました。

#### 5 まとめ

- ・今回の調査で、南門の柱跡が合計9基発見され、一部では当時使われていた柱材が残っていました。
- ・南門を八脚門として想定した場合、通り間口と考えられる柱間が狭いことや、II期官衙の中軸線からやや東にずれていることから、郡山遺跡のII期官衙における南門の規模は、八脚門より大きい規模（十二脚門など）であった可能性が考えられます（第5図）。

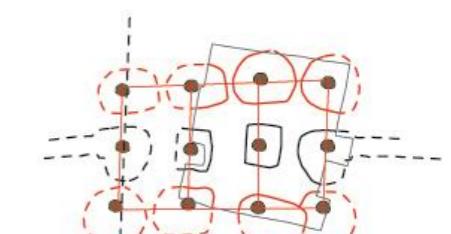


第3図 II期官衙模式図と第341次調査区位置

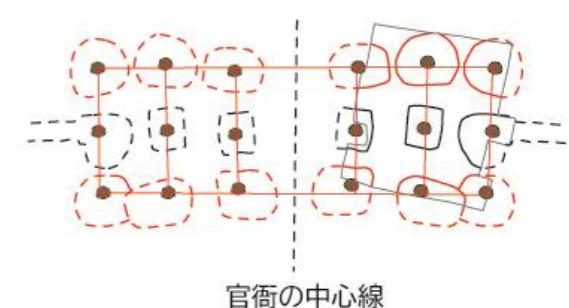


第4図 調査区の遺構配置図

想定①：八脚門



想定②：十二脚門



第5図 門の想定模式図

#### 昭和60年の発掘調査—第56次調査—

昭和60年に実施した発掘調査では、直径約50cm、高さ約150cmの柱が残っていることが確認されました。また、柱を取り上げて分析した結果、柱にはクリ材が用いられていることが分かりました。

この柱材は、現在、郡山中学校内の展示室で見ることができます。

